

令和8年3月31日

令和7年度 東京都立青梅総合高等学校 全日制課程 学校経営報告

東京都立青梅総合高等学校長

川口 元三

1 今年度の取組目標と方策

【 「やり抜く力」の育成と「新しい日常」を意識した取組の推進 】

(1) 教育活動の目標と方策

① 学習指導（「考えさせる授業」の定着）

ア グランドデザインである青総スキルの活用等により「考えさせる授業」を一層推進する。

イ 授業外学習時間の増加を図るため、各教科が工夫した学習指導を推進する。

ウ 学習状況と成績の推移を分析して、生徒の課題解決意欲を引き出す授業を推進する。

エ 教科の枠を超えた相互授業見学や課程や学校の枠を超えた研究授業参加等から、そこで得られた改善点を生徒に還元することで、教員相互の授業力の一層の向上を図る。

オ 「やり抜く力」を合言葉に、自分の未来を創造する意欲を身につかせ、生徒に希望進路実現に沿う学力や実践力を目指させる。

カ 教職員のデジタル技術の活用力を高め、オンライン学習活用の着実な定着を図る。

キ 高大接続改革を生徒の期待に応えるよう、さらに具体的に推進する。

(自己評価) 教員が、グランドデザインである青総スキルを意識し、考えさせる授業の定着に取り組めてきている。しかし、生徒に知識偏重型授業、端末の効果的な活用について、一部課題は残る。教員の活発な相互授業観察、意識変化がさらに必要である。次年度は、生徒に高い目標と挑戦する力を身に付け、学習指導の充実を図っていく。

② 進路指導（「やり抜く力」を発揮させる場）

ア 「自分でつくる、自分の未来」を実現させる指導の一層の充実を図る。

イ 「やり抜く力」を育てるため、将来を見通した視野と自己肯定感を育みながら、希望進路実現に果敢に挑戦する意欲の向上を図る。

ウ 担当年次教科教員が全員参加して模試等の結果に基づく分析会を実施し、教科で対応策を検討し改善する。

エ 進路指導部が主導して、年次と連携した指導を一層充実させる。

(自己評価) 「やり抜く力」の育成を今年度の目標として取り組ませたが、国公立や難関大学合格者は、昨年度に比べ、減少した。本校の特色である「進路の多様化」の実現に組織的取組を検討する。今年度の希望進路満足度は、97%であった。また、進路指導部・各年次が連携し、学力分析を行い、生徒一人一人の進路実現に向けた組織的対応、スタディーサプリを活用した家庭学習の取組に重点をおいた指導を行っていく。

③ 生活指導・安全指導（規律ある学校生活の定着）

ア 生徒が自ら誇りをもって、主体的に本校の生活規律を守り改善する態度を育成する。

イ いじめの未然防止・早期発見・早期対応に取り組むため、学校いじめ防止対策委員会機能や学校カウンセリング機能を充実させ、学校全体で情報共有し、いじめ総合対策に基づいた対応をより推進する。

ウ 校内研修を通して教職員同士が体罰に対して相互に看過しない体制づくりを一層推進する。

- エ 青梅総合SNSルールは、生徒会を中心に検討・改善し生徒へ周知していく環境を定着させる。
- オ 登下校中事故の未然防止を組織的に取り組み、安全指導の徹底を図っていく。
- カ 校則については、三者懇談会（学校代表・生徒代表・保護者代表で構成）を開催し、学校の実情や生徒の意見、保護者の意識、社会の状況等を踏まえ、適宜見直しを行い、生徒に守っていかうとする意識をもたせる。

（自己評価） いじめ防止研修会を学期に1回行い、未然防止に努めたが、いじめ防止対策委員会を開催する事案があった。校則は、教員・生徒会でつねに意見交換できる体制を取り、共通認識を図った。保護者会や学校運営連絡協議会でも学校からの報告を行い、様々な意見を聴取できる環境を整えた。特別指導に関する案件は減少し、ルールを守ることの徹底を図ることができた。服装などの身だしなみについても年間を通して指導を徹底した。自転車安全運転指導の実施を意図的、計画的に実施し、自転車乗車時のヘルメット着用について、年度当初から継続的に指導を行った。生徒一人一人が交通事故、安全な通学ができるよう一層の意識改革が必要である。不適正なSNS利用状況は無かったが、表面に出てこない案件が存在しているという姿勢で、今後も生徒会とともに啓蒙活動を継続させなければならない。

④ 特別活動・部活動（「やり抜く力」の実践的育成の場）

- ア 各行事は、生徒が主体的に取り組み、達成感を高める工夫を図る。
- イ 事前指導を徹底し、実行委員が自らの判断で動けるような自律的な行動力を育む。
- ウ 体罰や不適切な言動のない指導を前提に、生徒が主役の部活動づくりを一層推進する。
- エ 「文化・スポーツ等特別推薦入試」を実施している部活動を中心に、運動部・文化部ともに相乗作用として部活動の活性化をより推進する。
- オ 姉妹校交流推進校としてドイツとの交流を継続するとともにサブカテゴリー国との交流も推進し、国際交流というレガシー構築を推進する。
- カ TOKYO GLOBAL GATEWAY 事業を活用したグローバル人材育成を、1・2年次全員参加で実施を継続する。（自己評価） 各行事が制限なく生徒主体となって企画・運営でき、達成感も高まり、大きな自信となった。運動部において部員が減少する部活動があった。姉妹校交流推進校としてドイツボッパルト市カントギムナジウム校の生徒20名を受け入れ、ホームステイを行いながら、活発な交流活動を行った。大韓民国三槐高校とも姉妹校提携を結び、修学旅行において、同校との交流活動を行った。また、釜山外国語大学への語学留学等も実施することができた。さらに、海外学校間交流推進校の指定を継続申請し、交流の推進、レガシー構築を図っていく。また、体罰や不適切指導未然防止研修を行い、教員のさらなる意識向上を図っていく。

⑤ 心身の健康づくり（健康生活への組織的対応の推進）

- ア 内外に相談業務の見える化を一層推進する。
- イ 教員の受容的態度を基本に日常的に生徒の状況を把握し、全教員が必要な情報を共有するとともに、各学期初めには生徒の状況確認を確実にし、心身の健康づくりと早期ケアを一層充実させる。
- ウ スクールカウンセラーが2名配置されたことを活用し、校内研修等を通じて、学校の相談体制・教員のカウンセリングマインドの向上を推進する。
- エ 特別な支援が必要な生徒への共通理解と組織的な対応を推進するため、特別支援コーディネーターを2名体制にして特別支援教育を推進し、個別案件に丁寧に対応する。
- オ 「TOKYO ACTIVE PLAN for students」に基づいて体力向上を図り、心身の健康づくりを一層推進する。
- カ 自他の生命の大切さを実感させる取り組みを推進するため、組織的な相談体制を充実させ、生徒の心身の悩みに対応するとともにいじめ撲滅を強く決意していく。

(自己評価) 通級指導について保健相談部主任を中心に内部指導教員と外部受託業者が連携し、生徒の自立活動の単位習得を図った。教員向けに特別支援研修を年に2回、保健相談部と各年次担当が委員会を5回実施し、より細かい情報を共有し、当該生徒の合理的配慮を行った。その結果、通級指導を経験したいと自ら手を挙げる教員が出てきた。通級指導は、「誰もができる」を校内の統一スローガンとし、常にその過程を企画調整会議で詳細に報告するとともに都教委の新たな施策の浸透を図れた。次年度はカウンセリングマインド向上のため、スクールカウンセラーを講師に、校内研修を定期的に行い、通級指導の組織対応を実践させる。生徒の体力向上を維持させるため、「TOKYO ACTIVE PLAN for students」に基づいた指導を推進し、生徒の体力向上を図っていく。その向上に向け、体力テストを行い、結果を分析し、全校的な取組を具現化させることが課題である

⑥ 募集・広報活動（情報発信・提供の強化と地域連携）

- ア ホームページやエックスの随時更新により、本校の教育活動をタイムリーに発信し、中学生やその保護者、地域の方々の本校に対する興味・関心及び理解と信頼を得る。
- イ 個性ある総合学科として、その取り組みや成果の「見える化」をより推進する情報提供していく。
- ウ 近隣中学校と連携を図り、中学校教員や中学生保護者の総合学科理解を一層推進する。
- エ 学校説明会や合同説明会等において本校理解を推進するため、「都立高校の魅力向上に向けた実行プログラム」に基づき、効果的で印象的な広報手段を検討し、期待に応える総合学科としてアピールしていく。

(自己評価) 今年度は、広報活動を学校経営計画の重点取組として取り組んだ。従来からのホームページ更新、学校説明会の企画・計画、中学校への説明会は全て受け入れ、新規塾訪問の実施など、「自分でつくる、自分の未来」を目指す高校としての本校アピールを積極的に実施した。学校説明会での反応は悪くなかったが、入試倍率は、推薦に基づく選抜及び一次学力検査共に減少し、学力検査は、二次募集まで行った。都立高校全体の応募倍率低下の要因もあるが、総合学科としての特色を示すだけでなく、中学生及び保護者のニーズに応えるような、魅力ある学校を創る必要がある。

⑦ 学校経営・学校運営（連携と育成、体制の確立）

- ア 学校支援センターとの連携を密にし、職務の効率化を図り学校経営の基盤をより強化する。
- イ OJT を活用して各職層の人材育成を図り、課題解決に取り組む活気ある校内体制を推進する。
- ウ 生徒や保護者、地域住民からのアンケートに基づいた「期待に応える学校づくり」を推進する。
- エ 管理職が率先して「ライフ・ワーク・バランス」を示し、計画的な仕事の進め方により業務の効率化を徹底し、全教職員の働き方改革プランを一層推進する。

(自己評価) 西部学校経営センター支所との連携し、信頼される学校経営に努めた。教職員の人材育成では教育管理職B選考に1名、4級職選考1名合格した。来年度も対象となる教諭に応募を促し、人材育成をより推進していくことも課題である。OJT は分掌内・年次内で年間を通じて実施することで若手教員がより良い成長を見せている。これらのことは「期待に応える学校づくり」に欠かせない事であり、こういった部分をさりげなくアピールする方法を検討していきたい。進路実績の向上・生徒の実態に合わせた校則改善・PTA との連携・地域防災拠点としての開かれた学校づくり等と期待に応えてきたが、様々なアンケートや実際の声等をもとにさらに学校改革を推進していかなければならない。

(2) 次年度以降の重点目標と方策

- ① 教職員のデジタル技術の活用力向上 様々な場面でのシステム活用やオンライン活用の推進。
- ② 「考えさせる授業」の定着 各教科で指導内容を検討し、全教員がその観点で相互授業観察を実施。
- ③ 高大接続改革 「自分でつくる、自分の未来」の実現と目標設定のため新規開拓を継続。

- ④ 読書活動の推進 授業やHR 等も含めた教育活動全体で図書館の意図的活用をより推進する。
- ⑤ 授業外学習時間の増加 各教科が計画的に推進。補習・補講体制の確立。自習室の積極的な活用。
- ⑥ 「やり抜く力」の育成 教育活動全体で、困難にあってもくじけない勇気を育成する。
- ⑦ 募集・広報活動の充実 本校の認知度を上げるための様々な方策を実施する。
- ⑧ 国際交流事業の推進 姉妹校との交流や海外修学旅行等、新たな国際交流を含めた事業を展開する。

令和7年度の数値目標と実績

数値目標	令和7年度 数値目標	令和7年度実績
① 進路決定率	100%	94%
② 進路決定満足度	100%	97%
③ 特色ある大学等合格者数 ア 農業系大学等合格者 イ 看護系大学等合格者	ア 10名 イ 25名	ア 6名 イ 21名
④ 資格取得 ア 英語検定準2級以上 イ 漢字検定準2級以上 ウ 情報処理検定各種2つ以上合格 エ 農業関係資格検定	ア 100名 イ 30名 ウ 講座選択者全員合格 エ 講座選択者全員合格	ア 75名 イ 29名 ウ 選択者全員合格 エ 選択者全員合格
⑤ 部活動加入率	90%	92%
⑥ ホームページ・エックス 更新数	500回	374回
⑦ 図書館貸出冊数	3000冊	2361冊
⑧ 学校説明会等参加人数 (中学生・保護者合計)	3000名	3049名
⑨ 入学者選抜応募倍率 ア 推薦入学 イ 学力検査	ア 2.80倍 イ 1.40倍	ア 1.97倍 イ 0.97倍
⑩ 農業科・家庭科 地域連携活動回数	50回	55回
⑪ 学校満足度 (肯定的回答) ア 生徒 イ 保護者	ア 100% イ 100%	ア 82% イ 83%